

特集 見逃しと誤診を防ぐ

序 文

「骨折を見逃した」、「誤診であったことを後から他の医師に知らされた」。誰もが経験があり、ドキッとして冷や汗をかいた、心配で夜も眠れなかった、決して忘れられないような出来事であろう。その後、大事に至らなければ教訓として胸に刻まれ、不幸にしてなんらかのよくない結果が患者に起こったならば、自責の念にさいなまれる。長年臨床医をしていると、そのようなこともあるのだが、もちろんそのようなことはないほうがよい。迷惑を被る患者さんが1人でも出ないほうがよい。医師が成長するうえでのLearning Curveなんて言葉では済ませられない。さらに困ったことに、前医がなにか見逃しや誤診をしていることに気づいた場合でも、その医師が知り合いでなければ、多くの場合は、わざわざその医師にそのことを連絡することはない。つまり本人にはフィードバックがかからずに、いつまでも気づかずに誤診を繰り返すことになる。そのような状況はとても多いと推測される。積極的に教えてもらえないと、そもそも知る機会がない。有名な人の講演で勉強しようと思っても、そのようなことに特化した講演も多くはない。ましてや、全身の運動器を、小児から高齢者まで扱う整形外科の守備範囲は、他の診療科に比してとても広い。すべてに精通するまでには生涯かかりそうである。

そのような状況で、どうやって教育を受けるべきであろうか。それぞれの分野のエキスパートであれば、その分野において見聞きした見逃しや誤診をよく知っているだろう。そして、そのような誤診が発生していることを憂いているだろう。それをまとめて1つの書物にすれば、日常診療における手助けになるだろう。そのような気持ちで増刊号を企画した。整形外科における各専門分野からの執筆のみならず、神経内科やリウマチ内科からの執筆も依頼した。すべてを記憶することは困難であろう。しかし、一度目を通しておけば、知っていることと知らなかったことが頭に入り、なんとなく書いてあったことが思い出せるであろう。この本を外來の脇に置いておけば、日常診療でふとなにかにひっかかったときに読み返して再確認できるであろう。そのように役立ててもらえればありがたく思う。不幸な患者さんを1人でも減らすために。

東京女子医科大学整形外科
岡崎 賢